



園だより 1月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和7年1月8日発行



鳥たちの楽園

園長 佐藤 淳穂

新年あけましておめでとうございます。2025年は初日の出を拝める穏やかな朝からスタートしました。今年も子どもたちはいろいろなことに挑戦しながら、脱皮をする度に大きくなっていくへびのように、心も体も成長していくことでしょう。

冬休みの幼稚園は、鳥たちの楽園となりました。収穫せずに残しておいた高いところの柿の実を目当てに、たくさんの鳥が集まってくるのです。ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、シジュウカラ、ハクセキレイ、ワカケホンセイインコ、そして小さなメジロも「チッチッ」と鳴きながら実をつついていきます。子どもたちの笑い声に驚いて、どんぐりの木や藤棚の茂みとの間を行ったり来たりしていた鳥たちは、冬休み中の園庭では何の遠慮も必要ないというわけです。

12月中には、柿の木を見上げて「ツミが来てる！」と言った子どもがいました。ツミとは、5月から7月まで本園のどんぐりの木で子育てをした小型のタカです。ツミの家族は、3羽の幼鳥の巣立ちとともにどこか（本によると南の国）へ旅立っていったので、寒いこの季節に現れるわけはありません。半年たった今でも子どもたちの心に面影を残していることに体験の深さを感じました。

子どもたちがツミを思い出したのは、もう一つの思い当たる節がありました。それは12月初旬のこども会です。年長組のつくった劇の中に、ツミが登場していたのです。いろいろな星で暮らす者たちが次々にブラックホールに吸い込まれてしまうというオリジナルの物語ですが、ツミの役を名乗り出たAさんはくちばしを付けて生き生きとツミを表現していました。両腕に付けられた羽の細かい羽毛は、私たちに、どんぐりの木の上にいるツミの産毛をよみがえらせました。

劇を見た翌日の年少組では、三角に切った画用紙をお面バンドに付けたツミが現れました。小さなツミは園庭に出ると、ベンチからジャンプをしたり、滑り台のてっぺんで羽を広げたり、タイヤブランコに揺られたりして、空を飛んでいるイメージを楽しんでいました。三角のくちばしを付けたツミは瞬く間に5羽、6羽…と増えて、ツミごっこはしばらく続きました。

ツミの子育ては、園児が皆で共有した出来事でした。共通の体験は子どもたちの遊びの中にテーマとして生まれやすく、広がりやすいことがわかります。園庭で感じられる季節や自然との出会いが豊かな感性をはぐくみ、友達との関係をつないでいくことも裏付けています。ご家庭でも、いつか、親子でどんぐりの木を見上げたことを語らう日が来るかもしれません。今年も、豊かな園庭の環境づくりに努めていきたいと思えます。